

さつまいもの新規導入に係る調査研究

さつまいも栽培研究会

代表 高田 紗敏

1, 調査研究の目的

収益性向上に向け、新たな作物の導入を検討した結果、近年北海道でも増えているさつまいもの栽培に挑戦しようと考えた。温暖な地域とは異なるこの場所における最適な栽培方法を模索するとともに、栽培技術の向上を図ることで安定生産を実現し、収益性アップを目指す。

2, 調査研究の方法・内容

	品種	ベニアズマ	
	育苗期間	3月17日～5月31日	
	圃場定植日	6月1日	
	畝幅	75cm	
	株間	40cm	
	マルチ	銀ネズマルチ0.018x95	
	肥料	農配馬鈴薯2号 10kg/1a	
	農薬	ベンレートT水和剤200倍 (植え付け前苗消毒)	
	収穫日	9月30日	
	収穫量	148kg/1a	
			(表1)

3、調査研究の結果

まず始めに、さつまいも栽培において、最もコストがかかるのが苗代ということで、ビニールハウスで苗の増殖を行った。内容としては、3月中旬にN,P,K各20g/m²を施肥し、黒マルチを張った土床にウイルスフリー苗を15cm×15cmの間隔で定植。トンネルをした後に3種類の保温性のあるマットを用いて無加温栽培を行った。(写真1) 結果としては、昼間のハウス内温度は曇りの日でも適正温度の20℃前後を保っていたが、夜温は4℃を下回る日もあり、苗自体は枯れることはなかったが、徒長が停滞している感じで節間の短い苗となってしまった。(写真2)(写真3)



6月上旬に(表1)の内容で圃場に植え付けを行った。当初は3aの圃場を予定していたが、苗の不足により1a分の面積しか植え付けできなかった。植え付け後の管理は雑草処理のみで、収穫時期まで無農薬で栽培を行った。収量結果としては、基準収量250~300kg/1aのところ、148kg/1aと苗の影響もあり残念な結果となってしまった。

4、今後の課題と方策

今回の研究で、寒冷地でのさつまいも栽培の難しさを感じさせられた。苗の育苗においては電熱線や電熱マット等を用いて夜温の問題を解決し、丈夫な苗を作ることが収益性アップにつながると実感。圃場においても、株間や畝幅、苗の植え方などでいろいろな可能性を秘めているさつまいもの栽培技術の研究も今後行っていきたい。



定植後圃場



苗消毒



9/14 試し掘り



1本 2kgのさつまいも



収穫したさつまいも